

異なる専門性への対応—家庭科教員と保育者養成

家政教育・金子 省子

1. 授業科目の概要

学校教育教員養成課程の家政教育専修及び総合人間形成課程生活環境コースの選択科目である。家庭科教員免許状の選択科目となっている。また、保育士資格の「保育の本質・目的の理解に関する科目」群の必修科目である。

受講生は、生活環境コース3回生10名、同4回生1名、学校教育教員養成課程3回生10名だった。学校教育教員養成課程の内訳は家政教育3名、保育士養成コース7名だった（1名は家政で保育士コース所属）。

授業の目的は「児童を取り巻く環境の現状をふまえ、児童福祉の理念、制度、方法、諸領域に関する課題について理解する」である。

主として学部 DP1（知識・理解）に関する科目として、次の4点についての知識・理解に関して到達目標を掲げている。

1. 児童問題・児童福祉の歴史的展開、理念 2. 法制度と実施体制 3. 保育、児童養護、健全育成などの諸領域についての施策の現状・課題 4. 児童の権利条約の視点から捉えた児童福祉の課題

授業形態は、講義が中心である。教科書を使用し、毎回の授業概要のレジュメ及び関連する資料を配布、一部パワーポイントを用いた。また、児童相談所や児童養護・児童虐待に関連する内容のビデオを使用した。このほか、グループごとにディスカッションをする時間を複数回設けた。

児童問題・児童福祉の歴史的展開、理念、法制度と実施体制の講義後、第5回で確認テストを行い知識の定着を確認し、第15回に最終試験を実施して、各回の提出物を含め評価した。

家庭科教員免許を取得する学生は家庭科の保育分野の授業内容として児童福祉に関する知識を必要とする。一方、保育士コースで保育者を志望する学生は、児童福祉の専門職である保育士の役割や保育士・保育の場を取り巻く今日的課題に最も関心が高い。また、小学校教員を目指す学生や生活環境コースで教員免許取得を目的としない学生もいる。こうした多様な進路希望をもつ3

回生以上の学生に対し、子ども・家族福祉の内容構成を配慮する必要がある。アンケートに基づく分析に加え、今回は多様な学生の多様な問題関心と知識・理解の定着に関して考察する。

2. 授業アンケートの結果に基づく分析

(1) 授業の DP アンケート結果

DP に対応する授業であり、回答結果より学校教育教員養成課程では1A：教育に関する確かな知識について「とてもそう思う」「ある程度そう思う」がそれぞれ5名、総合人間形成課程では1B：自分の専門分野の知識について「とてもそう思う」5名、「ある程度そう思う」が2名となっていた。このほか2Aや2Bの現代的課題についても対応について肯定的な回答結果であった。

(2) 授業についての独自アンケートの結果

8項目について5段階評定（a：強くそう思う b：ややそう思う c：どちらとも言えない d：あまりそう思わない e：全くそう思わない）で回答を求めた。また、進度・難易度について5段階（a：とても難 b：やや難 c：適切 d：やや容易 e：とても容易）で尋ねた。このほか、良かった点と改善すべき点について自由記述で回答を求めた。第15回の最後に実施し、回答者数は21名だった。

- (1)「出席状況の良好さ」は、aが13名で一番多いが、おおむね良好だった昨年と比較しcが3名、eが1名とあまり良好でない学生も含まれる。
- (2)「シラバスの提示、予定の伝達など」については、aが16名、bが5名で肯定的な評価だった。
- (3)「授業テーマと構成・展開の明確さ」については、aが11名で最も多く、ついでbが7名だが、cが1名、dが2名おり、毎回レジュメを配布したが、十分に理解できない学生もいた。
- (4)「教科書使用の適切さ」について。教科書は、昨年より分量を抑えたよりコンパクトなものに変更しており、これにあわせて資料配布を行った。結果は、aが10名、bが7名で、おおむね肯定的な評価といえるが、cが4名いるなど、適切と判断しにくいと考える学生もいた。
- (5)「配布資料使用の適切さ」については、aが9

名、bが9名だった。

(6)「進度や難易度の適切さ」については、適切が15名、やや難が6名で、容易であるとの回答はみられなかった。

(7)「意見の発表や意見交換の機会の保障」については、bが6名で最も多くaが5名で、おおむね肯定的な回答結果だったが、十分なディスカッションの時間を設ける工夫は一層必要と考える。

(8)「今後意欲をもって学びたい課題の発見」については、aが8名、bが11名とほとんどの学生が課題意識をもてたと回答しているが、c「どちらともいえない」との回答者も2名いた。

<自由記述>

「良かった点」は、全員が記述しており次のように整理される。

・学習方法について

(1)教科書・資料の有効な活用が理解を深めることにつながった。レジュメで重要な点がわかりやすかった。教科書とほぼ同じ流れで構成されたので復習しやすかった。

(2)資料、具体的な事例紹介、教員の経験をもとにした話で教科書だけではわからない部分を具体的に理解できた。

(3)情報を収集しグループでディスカッションをするなど、他の意見に刺激を受けたり、考えを深めることができた。

・学習内容について

(1)法制度などの基本的事項を学べ、現代的な課題までしっかり学べた。問題への取り組みについても知ることができた。

(2)非行、虐待などさらに事例と支援方法を学びたかった

(3)現代社会の問題について、自分にかかわってくるかもしれないと考えて学べた。

(4)将来親になったとき、活かせる内容だった。虐待の親だけを責めるのではなく、多様な角度から考えられるようになった。

「改善すべき点」は16名が記述していた。

・学習方法について

配布プリントについて、もっと詳細な説明をいれてほしいときがあった。教科書と黒板をもっと積極的に使用してほしい。もう少しグループディスカッションの時間がほしかった。児童館見学や子育て中の保護者の話なども聞いてみたかった。

・学習内容の理解について

試験準備で、重要なポイントがわからなかった。レジュメと講義の関連がわからなくなるときがあった。

以上のように、レジュメ、配布資料や教科書、

情報収集課題とディスカッションについてその効果を捉える回答が多く見られた。一方で、理解がやや難しかった学生では、資料の記載や板書などを丁寧にしてほしいという要望がみられた。

3. 考察—専攻及び進路希望の異なる学生に対する学習の動機づけとその効果

家庭科保育学習における知識の活用の見直しをもてるよう、また将来の保育者の視点をもって学習を進められるよう、保育制度、児童養護、児童虐待、母子保健の領域については特に意識した。

(1)児童福祉に関する地域情報の収集から学ぶ地域福祉情報の収集と発信、これにかかわる学習の重要性を理解できるよう、地域の保育所・認定こども園の情報をいろいろな立場を想定して収集し、記載したシートをもとにグループで話し合う時間を設けた。学生には事前に収集した内容と方法(情報源)、収集しての気づきを書くよう求めた。その結果、内容と方法については記載されても、「いろいろな立場を想定して」という点については、「保育所を探す親」というような明確な視点をもつものがある一方で、意識化されない学生も見られた。前半の授業回でもあり、この視点自体をある程度例示する必要があった。

(2)多様な立場を想定して児童虐待を考える

児童虐待についての学習のあと、予防についていろいろな立場(保育者、教師、地域住民を例示)を自由に選択し記述させた。その結果、保育士コース学生は「保育者として」、他は「教師として」「家庭科教師として」「地域住民として」あるいはこれら複数の視点から、その担うべき役割や具体的行動についての考察がみられた。2回生の保育学では、子育て困難など支援される親という視点が強いのに対し、支援する側の視点の意識化ができたと考える。

4. 次年度に向けて

ディスカッションや発表などの時間の確保と幅広い児童福祉分野の知識・情報量の定着の両立は引き続き課題である。教科書やレジュメ使用でも理解がやや難しいとする学生もおり、授業時間外学習と確認テストの実施方法をさらに工夫する必要がある。授業時間外学習をさらに課すことで、ディスカッションの時間を増やすことも考えられる。また、本年度授業時間外学習(課題)については、熱心な取り組みがみられ、ディスカッションにも活かされているが、自発的な学習は非常に短時間にとどまっており今後の課題である。